

全国セミナーを終えて

企画委員長 加納孝代

今年の全国セミナーのテーマは「教育・ハラスメント・共生」、副題は「あらゆるハラスメントを乗り越えるために」でした。昨年秋以来、乳幼児・児童が保護者によって虐待される事件が頻発し、その背後にDVも指摘され、「ハラスメント」が今日の日本社会の大問題であると感じられつつあったからです。

ハラスメントにはいわゆるセクハラやDVなどの性暴力のほか、職場や教育現場でのパワハラ、障がい者や高齢者や弱者への虐待があり、その様態は多岐にわたります。ボランティアのNPO団体はハラスメントの被害者を守り、その人々が平穏な日常を取り戻せるようにと、精一杯の支援活動を行っていますが、到底間に合いません。他方加害者に厳罰を望む声も強くなっています。繰り返す性犯罪者には「烙印」(スティグマ)を押すべきだと言う人もいれば、それに反対する意見もあります。

誰でも平和な日々の継続こそが幸せの原点だと感じるでしょう。ところがハラスメントをする人は、自分の手でその幸せを破壊しているように見えます。ハラスメントの具体例を見ると、自分で責任をとらず、他人のせいにするなど、多くが当人の人間的未熟さに起因しています。自分が相手より強いことを見せつけたい、人の上位に立って権力(影響力)を振りたい、人の痛みや悲しみが分からない、自分の行動が結果的に周囲も自分も不幸にすることを先回りして考えることができない……。親たちは、社会は、子供をきちんと育ててこなかったのでしょうか。

「異常に乱暴な人」はいつも、どこにもいるものだ、と諦めかけていたところに、もしかしたらそこで「教育」が力を発揮できるかもしれない、との希望が見えてきました。さらには、「自分と人とは同等の価値を持つ存在である」、「自分が人を助けつつ、同時に人に助けられつつ」生きてゆくことが「共生」なのだ、と気付かせるのも家庭や学校や社会での「教育」の重要な目標なのではないか、という気がしてきました。

「教育」と「ハラスメント」と「共生」はこのような形でつながるのではないだろうか、とのヒントが得られた今回のセミナーでした。(本文 867 文字)